

ライナー：

Drop～というのはスーツの腹囲の細さを表す用語で、今回の8はかなり細めのサイズとなります。（当日作曲者が着ているはずのジャケットがDrop8です）

一度だけDrop10というのを聞いた事もありますが、通常の方ですとDrop6辺りをお召しになるのではと思います。

一昨年三重奏でDrop6を作曲しましたが、今回は8という事で、前作よりさらに鋭い音質を念頭に作曲しております。

曲自体について申し上げますと、大まかに言って3部形式のような構造となっており、それぞれ「生地織り」「型紙作成」「縫製」という部で作られています。生地については言うまでもなく、その織り方、模様、原毛で全く趣向の違う物が出来上がりますが、今回は冬の初演という事で、寒さに強い英国の、昔ながらのションヘル織機で作られる様な生地をイメージしています。ションヘルは現代の高速織機とは違い無駄な動きが多いですが、その分膨らみのある風合いある生地が出来ます。

型紙作成とは要するに、デザインの決定です。デザインの決定と言うと何か芸術的な感覚を思い起こされるかもしれませんが、顧客の体系に合わせたミリ単位での線引きが必要な（それも体の各部位の動きを予見した）、経験とアイデアに裏打ちされた、どちらかというと言職人技の様なものです。この型紙作成の過程で着心地と見た目のほとんどが決まるほど非常に繊細で重要な仕事です。

最後の縫製の部分は、主な要素を第1部から引用していますが、英国生地に見合う、無骨でしかも的確な縫製をイメージし、1部には無い2つの要素を投入しています。まず、イタリアやフランスのようなエレガントなものでは無く、アングロサクソンの仕立て職人らしく荒々しくて堂々とした、頑強な針さばき。

そして最後に、重い英国スーツを限りなく着心地良くするために最も職人の手腕が問われると考えられる、着る人の動きを完全にサポートする豪快な袖付け。

この2カ所を伴って、この作品を1つの聴く物として、お聴き下さる皆さんにお届け出来ればと思います。